

〈書評〉

大橋史恵著

『現代中国の移住家事労働者—農村—都市関係と
再生産労働のジェンダー・ポリティクス』

(御茶の水書房 2011年 304頁 ISBN 978-4275009203 7,800円+税)



大浜 慶子

著者によれば本書の研究は、北京の「^{だこうまいのいえ}打工妹之家」(出稼ぎ女性のためのNGO)における参与観察と、そこに集う家事労働者たちへの継続的な聞き取り調査から始まったという。2004年より自ら北京の街を探訪し、様々な方言を話す農村女性とラポールを構築しながら現地フィールドワークを重ね、「北京の家事労働者の生きている歴史的過程をとらえようとしてきた」。社会学とジェンダー論の見地から現代中国の再生産労働問題に取り組んだこの研究は、2011年度山川菊栄賞に輝き、日本の女性問題研究に貢献した成果として今広く注目を集めている。このことは評者のように長年中国に滞在し、ジェンダー研究を志す者にとっても大きな勇気と刺激を与えてくれる。まずは著者に心から祝福の言葉を贈りたい。

本書の冒頭は学術書としてはいささか型破りである。著者がインタビューを行った11名の出稼ぎ家事労働者たちのプロフィールが語られる。さらに頁を捲ると北京市街地の地図が出てくる。北京を訪れたことのある者にとってみれば馴染みのある地図だがどこかしっくりしない。よく見ると北京市民の日常の足である地下鉄やオリンピックを境に急激に拡張している都市鉄道網が描かれておらず、代わりに出稼ぎ労働者を乗せ、地方から北京に乗り入れる長距離列車の路線と停車駅が書き込まれているからだと判明する。「打工妹之家」の変遷跡地、北京駅付近の崇文門に形成された農村出身者の労務市場など、出稼ぎ労働者の視点に立って今一度北京市を眺めてみれば、発展めざましい首都の相貌がまったく違った表情を呈して私たちの前に立ち現れることに衝撃を覚える。

ここで取り扱われている女性達は出稼ぎ労働者の中で最も顔の見えない存在である。家庭という私秘性の高い空間に囲い込まれ、住み込みで働く彼女たちはめったに外出しない。この特殊な就業形態の従事者と家政サービス業者は年々増加しており、都市世帯の再生産労働を下支えし、中国経済の発展への寄与度を高めている。にもかかわらず多くの出稼ぎ家事労働者は今なお旧来の戸籍制度に分断された農村都市間を、社会保障の根本的な改善も得られないまま、根無し草のように移動し、都市家庭を転々と渡り歩いている。この捉えにくい存在を本書は可視化し、解明に挑む。

評者は長年北京で研究を行ってきたので、中国との比較において気づいた点を述べてみたい。1980年代より中国では、学校教育の現場から数十年にわたって姿を消していた家政学が復活して脚光を浴びている。近年専門書も刊行されるようになったことから、北京の書店で家政学教材を収集したことがある。その内容の多くは二通りのパターンがあり、農村女性向けの啓蒙書もしくは家事サービスを巨大市場と見なし、経営管理に主眼をおいたものであった。日本とはいささか異なる事情に判然としないものを感じていたが、農村女性が都市の家事労働者として再生される本書の独創的なディスコース分析(特に第4章)を読めば、なるほど中国家政学の楯の両面の論理がどのようにして成り立ってきたのかがよ

く理解できる。

中国の研究者による家事労働論も様々な雑誌に散見されるようになった。それらを俯瞰してみると、第三次産業や現代サービス業の成長と都市の共稼ぎ世帯の核家族化、高齢化にともなう育児、ケア問題に着眼し、これに農村女性の余剰労働力や失業対策を結びつけて政策的に論じる研究は多いが、家事労働の形成過程全般を見通した論考は少ない。本書は中国の現代家事労働の歴史を視野に入れ、その性質や重層的なシステムの生成に焦点をあて、家事労働者を取り巻く生存環境をも射程に入れて構造的に読み解こうとしている。再生産労働再編をめぐる分析の炯眼は、これまであまり対象とされてこなかった中国の女性運動内部へも向けられる。都市農村の女性間に形成されるジェンダー序列やそのポリティクスが孕む問題を掘り下げ、中国の女性学者でさえ看過しがちな、それ故に盲点となっている事象にも切り込んでいる。中国の女性学に関して言えば、1995年北京で開催された第四回世界女性会議以降、イデオロギー対立や種々の差異を乗り越えて“女性”という統合的な主体を生み出し、社会に認知させることによりやく成功した。その果実を定着させる努力の裏で同時進行していた社会階層分化にまつわるジェンダーと移動分析の角度から、中国の女性が一枚岩ではないということを示唆した本書の研究は中国女性学に対する一つの挑戦ともなろう。この点も含め、家事労働という問題系への着目、外部からの視点、さらに出稼ぎ女性の位置から組み立てなおすというユニークな視座がこれまでにない新しい研究をつくりあげている。

婦女聯や女性知識人の活動に柔軟な解釈を加えながらも、常に知的批判の精神を忘れない著者であるが、農村の出稼ぎ女性労働者に対しては一貫して既存のジェンダー体制を変革しうる戦略的な主体位置を探り続ける。グローバル化にともなう階層化や社会格差が日増しに深刻化している中国では、繁栄の陰で掻き消される人々の声を掬い上げ、これを社会全体の中に位置づけ、建設的な研究を創造しうる学者の良識が問われ続けている。本書はその意味においても、国を越えて本家中国とともにこの課題に取り組んでいるととらえることができ、高く評価できるのではないか。

本書の構成は序章と第1章～第6章、終章から成る。以下、各章の要点を紹介する。

序章「中国の家政サービスをめぐる問題への接近」では分析視角やキータム、調査方法を含む基本的なフレームワークが詳述される。研究の目的として北京市の家事サービスの形成過程を跡付け、その背後に働く政治的力学を解明すること、移動労働を実践する主体としての女性に着目することが明示されている。特にこの研究では、計画経済から市場経済化への政策転換における再生産労働の再編問題と、これに平行し農村女性の都市への移動がどのように結びつけられたのかという機軸の解明に力点が置かれている（1－4章）。複層的な移動構造とジェンダーの関係进行分析するための「回路」の概念、三つの分析水準—マクロ（二つの貯水池）、メゾ（社会関係）、ミクロ（水路）が提起される。本書は2009年にお茶の水女子大学大学院に提出された博士学位申請論文がもとになっており、国際的な研究視野からの刺激を受け、日本や中国以外の先行研究の知見もふんだんに織り込まれている。

第1章「近現代における農村—都市関係とジェンダー分業の交差」では、新中国成立から改革開放期にかけて農村都市の二元構造が戸籍制度を介在させどのように形成されたのか、またこの過程で女性の労働や再生産労働の分業がどのように再配置されてきたのかが中国の社会学者金一虹の「二つの貯水池」の概念を援用して分析されている。

第2章「改革・開放以降の社会構造の変化と都市家族」では、社会主義計画経済の下で都市のシステムや福祉を支えてきた単位制度が80年代に崩壊し、「社区」が生まれるなかで、都市の家族の再生産労働

働がどのように変化したのかについて様々なデータを駆使して考察されている。

第3章「市場経済化前夜における〈貯水池〉としての女性」は1980年代、活動を復活させた全国婦女聯の動向と北京市婦女聯が着手した家事労働者仲介事業に着目している。改革開放の推進とともに「女は家へ帰れ」論争や女性運動に対するバックラッシュが高まり、都市の再生産労働問題が都市-農村女性間の再編へと組み替えられていく経緯が犀利に分析されている。マルクス主義女性論の実践と都市部の女性の生産労働参加を維持するために、その再生産労働を肩代わりする農村女性が都市へ動員されるが、公の女性団体である市婦女聯が分断されていた農村-都市間の労働力移動の水門を開け、選択的に受け入れるゲートキーピングに関わっていったことが指摘されている。

第4章「市場経済化における農村開発と都市労働政策の連関」では90年代以降、市場経済の推進とグローバル化への接合という新たな背景の下、政府によって貧困問題や農村問題が重視され、「立ち遅れた」農村女性の素質向上という新たなイデオロギーが生まれてくる状況や、脱貧困化や労働力移転プロジェクトの遂行の過程で家事労働者の集団的リクルートが行われる状況に検討が加えられている。農村女性には職業訓練が施され、民間業者の提供するサービス労働に変換されて都市で商品として流通し、等級化されるパラドキシカルな構造やその管理、調整役が市の婦女聯から労働部門へとバトンタッチされていく回路の変化を立体的に浮き上がらせている。

第5章「移住労働の〈回路〉再編とジェンダー関係」はインタビュー調査を実施した家事労働者のライフヒストリー分析である。上記で明らかにされた移動の構造の中を実際に動く農村女性の視点から回路を捉え直す。家事労働への参与を転職や境遇の転換への「跳び板」に例える農村女性の主体性やそれを実践する「水路」の存在、画策について論じている。

第6章「『打工妹之家』にみる農村女性の〈水路〉の模索と集成的実践」では第四回世界女性会議が北京で開催された後、内外女性運動の機運の中から生まれたNGO「打工妹之家」の活動に注目する。その場所が流動的な生活を送る農村女性たちの一時的な「根下ろし」や解放、覚醒の場になっていることが説かれている。

著者は出稼ぎ家事労働者にかかる抑圧の構造を一つ一つひもときながら、「水路」を開く模索を行う。それが本書の最終的なねらいともなっているが、終章「〈回路〉と〈水路〉の連関をめぐる考察」で導かれた結語—「農村に戻るか都市に残るかという結論を出さないままに、彼女は〈水路〉を生きる『条件づけられた主体』としての問題提起を続け、次世代の女性たちに展望を見出そうとしている」というメッセージに、それが戦術的に記述されたものであるということを差し引いても、読者は出稼ぎ女性と中国社会の抱える重い現実と直面するのではないか。その閉塞感を中国という巨大なシステムの複雑さや、安定を維持するための制度の過酷さへと帰結させることもできる。だがグローバル化で私たちともつながっており、日本とも無関係ではなくなりつつある問題を、次世代まで据え置かずにとともに考える手だてを見いだせないものだろうか。

実は評者も出稼ぎ女性によって都市家庭の家事労働が担われている構図については、「女性の女性に対する収奪」ではないかという著者同様の疑問を抱き、婦女聯の研究者に直接ぶつけてみたことがある。返ってきた答えは、都市農村格差が歴然と存在し、すでに多くの女性が家政サービスに従事しているという現状の下、都市の女性が農村の女性の自立を助け、エンパワーメントを促すような相互扶助のしくみをつくることが一策だということだった。この意見はさらに吟味を要するとしても、本書は家事労働者の地方からの送り出しと都市での受け入れのシステム形成の分析に大半を費やしており、この政

策づくりに関与し、農村女性の権益保護などに取り組んでいる関係者にも話を聞き、意見を交わす機会があれば回路、水路の分析がより豊かに、開かれたものになったのではないかと思われる。

このほか一説には1500万人とも2000万人近くともいわれる中国全土の家事労働者の実態はどうなっているのか、家政サービス員不足になお苦慮する中国社会や雇用主のニーズは何に起因するのか、家事労働が実際に展開される家庭内部においてどのような現象が生じているのか、本書はさらに知的探究心を呼び起こす。これらを解明するには中国との協力も必要になろう。本書の先駆的で優れた研究が今後一層深まり、同分野の議論を活性化、進展させ、ひいては日中のジェンダー研究の共通の財産になっていくことに期待を寄せている。

(おおはま・けいこ／中国・中華女子学院荣誉教授)